

地域体験学習センター「堤町まちかど博物館」

建築と子供たちネットワーク仙台
(宮城県仙台市)



佐大ギャラリーの前にて



堤町まちかど博物館の案内

I. 活動の背景と目的

1-1. 背景

建築と子供たちネットワーク仙台（以下ネットワーク仙台）は住環境学習を通して子供たちの創造性を育むための活動を実践しているN P Oで、アメリカで開発された総合学習のカリキュラム「建築と子供たち」や「シティ・ビルディング・エデュケイション」を参考にした独自の住環境教育のためのプログラムを開発し、これまでに一般向けのワークショップ・シンポジウムや仙台市科学館での企画展示、学校と協力した環境学習授業を多数行い、住環境学習を通して子供たちの創造性を育むための活動を実践してきた。

その一環として1995年から市民センターで親子ワークショップを続けていたが、1997年のワークショップでの出会いをきっかけに、以前は焼き物のまちとして栄えた仙台市中心市街地北部の堤町にたった一つ残っていた六連の登り窯が壊されそうになっていることを知り、それを地域の資源としてまちかど博物館として再生し、子どもたちや地域の人々の地域学習・体験学習の場とする活動を進めていた。

幸運にも2001年度のハウジングアンドコミュニティ財団の助成を受けることができ、登り窯に隣接する作業場の2階を整備してギャラリーとして地域に公開することができた。当初ギャラリーは期間限定の予定だったが、訪れる人からの評判がよく、是非続けて欲しいとの要望が多かったため、その声を大事にしながら所有者である窯元とも話し合って、更なる内容の充実を目指すこととなった。

1-2. 目的

当初ギャラリーは期間限定で考えていたため、展示品にキャプションをつけるなどの作業が完成しないままになっていた。それらを充実させ、地域学習に使うに耐えうるものとすることと、また窯の方も整備して、堤焼の体験学習ができるように整備し、地域の人の交流の場としても利用されるようにすることが今回の目的である。

II. 活動の内容

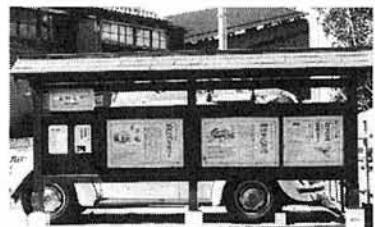
2-1. ギャラリーの整備

ギャラリーの開館継続が決まったため、更に内容を深めリ

ピーターにも楽しめるように、ネットワーク仙台のメンバーが中心となって展示品を整理したりキャプションをつけるなどの作業を行った。

2-2. 御仲下改所（おすあいどころ）記念板の設置

御仲下改所そのものは老朽化のため取り壊されてしまったが、解体作業の時、そこに使われていた柱や梁などの部材を一部保存していたので、それを製材して跡地に佐大ギャラリーと御仲下改所の説明書を取り付けるための記念板（高さ1.6m、幅3.6m）を設置した。記念板は往時の御仲下改所に似せた銅版葺きの屋根をかけたデザインにしてある。



御仲下改所 記念板

2-3. 登り窯の修復

一部土が崩れ、レンガの骨組みが露出していた登り窯を、冬と春の2回のワークショップにより修復した。土・スサ入りの粘土・耐火モルタルなどを準備し、粘土をこねる、土を塗るなどの作業をネットワーク仙台のメンバーが中心となって行った。



修復した登り窯

2-4. 体験用窯の新設

住宅地の中にあるという現在の状況から、登り窯に火を入れることは難しいものの、まちかど博物館に多くの人が訪れるに従って、「ここで堤焼の体験をしてみたい」という声が多く聞かれるようになっていた。そこで登り窯の近くにある松根窯に似せた一つ窯を作ることは可能であるという窯元の判断を受け、体験用の窯を新設することにした。登り窯の修復と合わせ、ワークショップによって内径50cm×60cm、高さ1m、アーチ型の焼き口がついた窯を完成させた。



体験用窯

2-5. 暖簾の整備

前回の助成で佐大ギャラリーの入り口に櫻の看板を取り付けたが、更に今回はギャラリー1階部分にある佐大商店と隣接する堤人形販売所・つつみのおひなっこやにお揃いの暖簾を掛けることにした。紺地に白く屋号を染め抜いた暖簾を作ったが、屋号がそれぞれ「ヤマ大」「ヤマ吉」だったため、偶然とはいえる通りからみると二つの暖簾は「大吉」と並んで見えることになった。

2-6. 堤焼づくりワークショップ

新設した体験窯に火を入れるために、堤人形作家・佐藤吉夫氏の指導の下、型抜きの人形や生活陶器を作るワークショップを行った。粘土は現在の堤人形と同じ物を用意してもらい、実際に作られている人形と同じ型を使わせてもらうことになった。この日使われた型の中には、市の有形文化財指定を受けることが決まり、この日を最後に触れることもできなくなるという貴

重な江戸時代のものもあった。また近くの小学校の5年生が総合的な学習の一環として堤焼のことを学習しており、泥メンコなどを制作することになっていたことから、それらも合わせて一緒に焼くことにした。

2-7. 説明板の取り付け

以前設置した記念板に佐大ギャラリーと御仲下改所の説明板を取り付けた。説明版は杉板にレーザーで絵や文字を焼き込んで制作された。



佐大商店(右)と堤人形販売所(左)
暖簾が「大」吉」と並んだ



堤焼きづくりワークショップ



佐大ギャラリーと御仲改所の
説明板

2-8. 新設した体験窯への火入れ式

ワークショップで制作した作品、子どもたちの作品、人形作家の作品は、それぞれ10日間ほど天火で乾燥させた後、一緒に窯の中に入れられて素焼きされた。焼き上がりには、温度管理と自然冷却などで丸一日かかることから、窯入れと焼き上げを前日に佐藤吉夫氏にお願いし、それを取り出すところを子どもたちが行うことで火入れ式とした。子どもたちや地域の方、ネットワーク仙台のメンバーら約50人の参加者と多くのマスコミが見守る中、佐藤達夫氏と子どもの代表の手によって窯の蓋が開けられ、窯から取り出された作品は、一つ一つ子どもたちの手渡しで大事に台へと並べられ、肅々とした中にも喜びにあふれた火入れ式となった。

III. 活動の効果及び今後の課題

今回の活動によって、地域は窯の火とともに消え去り、人々の記憶からも忘れ去られようとしていた堤町の堤焼が、まちにとってどういうものだったのか、そして便利な生活を追い求めるための都市開発と、歴史を守ることの意味とそれらのバランスについて、改めて意識するようになっていった。それはつまり自分たちの住む環境について、どういうまちに住みたいのか、何を守りたいのかを考えることでもあった。現在では、また焼き物が始まったという噂を聞きつけた地域の人々、特に高齢者がギャラリーに集まるようになっているという。焼き物の歴史と技術を大事に思いながらも、自分とともに消えてしまうだろうと諦めてもいた窯元の陶工は、まちかど博物館として自分の想いとコレクションが一般の人に公開されたことによって広く受け入れられてその価値を認められ、大事にされるに値するということを知り、館長としての新たな生きがいを見いだして生き活きとするようになった。その様子がまた地域の人をギャラリーに集める魅力の一つとなり、子どもから高齢者に至るまで様々な人が集まるという賑わいを見せている。

次の段階として、N P O (専門家集団) + 地域 + まちづくり行政の連携によるまち学習を展開することで、子ども・大人・地域のそれぞれを活性化させる可能性を求める。今後は「堤町

まちかど博物館」を核とする「地域体験学習センター」として整備し、子どもたちをはじめ、地域住民、市民に堤町の歴史と文化そして歴史的資源の保全の大切さに触れてもらいたいながら、よりよい住環境を考えてもらう場として、更に整備していくたいという構想を持ち始めている。例えば、体験窯を使った焼き物ワークショップや、焼いた堤焼を利用して造形・音楽・自然・歴史・まちづくりなどが融合した総合芸術ワークショップを行う計画があり、それに向けて準備を始めているところである。例えば堤町の歴史を調べた紙芝居を作り、堤焼で笛や打楽器を作ってその紙芝居に合わせた音楽を作曲して演奏し、堤焼の茶碗でお茶を飲みながらその上演を見せるということを、大人も子どもも一緒にやって行けば、いろいろな人がそれぞれの得意分野でまちに関わりを見出すことができ、それによってまちづくりは一時のイベントで終わるのではなく、地域の人の手によって持続されていくのではないかと考えられる。



窯のふたを開けた瞬間



作品を手渡しで運ぶ



できあがった作品を囲んで

<団体活動データ>

■建築と子どもたちネットワーク仙台

活動テーマ	地域体験学習センター「堤町まちかど博物館」
活動目的	子供・地域住民・市民など多くの人々が、地域の歴史的な資源の大切さを認識し、よりよい住環境を考えていけるよう、「堤町まちかど博物館」を地域体験学習センターとして機能させる。
設立年月	1993年4月
代表者名	細田 洋子
活動地域	仙台市青葉区堤町
メンバー	45名 大学関係者、建築家及び公務員、対象地域の住民(37名)

●団体設立の経緯

アメリカで開発された建築や都市を題材にした総合的学習法である「建築と子どもたち」に基づき、そのカリキュラムを用いた住環境教育等のプログラムを開発し実践普及することを目的に1993年4月に設立。

仙台のほか、東京、千葉、新潟に支部があり、情報交換等の交流を行っている。

● 活動地域図



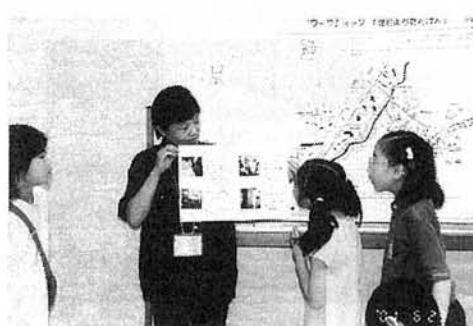
青葉区堤町は仙台市の北部にあたり、人口約4,000人弱の町である。仙台城下北部の警固のため配置された足軽集の町で、その後足軽の内職としてはじまった堤焼や堤人形により焼き物の町として知られるようになった。町名は町の南に流れる梅田川を堰止めた大きな堤があったことに由来する。奥州街道沿いの堤町は仙台城下の北の玄関口として栄え、江戸時代には御仲下改所（おすあいどころ）が置かれ、城下に持ち込まれる商品から関税を徴収していた。

●これまでの活動

「建築と子供たち」に基づき独自の住環境教育プログラムを開発し、これをもとに、設立以来学校と協力した環境学習授業や国際交流を目的としたワークショップ・シンポジウム等を実施している。2001年度の当助成事業により「建築と子供たちワークショップ2001」を開催した。子どもたちが、ポラロイドカメラを片手に「堤町まちたんけん」を行い、町をかたちづくっているものを観察し、それを記録した。その際、今回の助成事業の活動拠点となっている佐大窯（仙台に唯一残る6連の登り窯）と「堤町まちかど博物館－堤焼佐大ギャラリー」が大きな反響をよび、ワークショップ後も地域住民の見学が絶えなかった。そこで、堤町まちかど博物館を子どものための地域体験学習の拠点と資するとともに、訪れたすべての人に町の歴史と文化、歴史的資源の保全の大切さを実感してもらう場として活用することとなった。2001年度の活動の成果が2002年度の継続助成へつながった。



登り窯を利用したパネル展



人形作家の指導で行われた堤人形制作ワークショップ



まち探検後感想を記録する子どもたち



まち探検の感想を発表する子どもたち



未来のまちの模型を作り終えて



米国ニューメキシコ州の小学生とのテレビ会議

●助成対象活動

・佐大ギャラリー工房の整備

御仲下改所の記念板の製作・設置、人形展示室の分類作業、ギャラリー展示室のキャプションボードと人形キャプションの製作、暖簾の取り付け等

・松根窯修復ワークショップ、体験用窯の新設

当初予定していた松根窯現地復元が不可能となり、佐大ギャラリー内に松根窯を復元した体験窯を作った。

・堤焼づくりワークショップ

地域の小学5年生80名が体験用窯で型抜き人形、生活陶器等の焼き物づくりを行った。また、小学生以外にも地域住民が参加して、窯出しを行った。



登り窯修復ワークショップ

●これからの予定

体験窯を使った焼き物ワークショップ及びそこでつくった堤焼を利用した総合芸術ワークショップ等を行い、「堤まちかど博物館」を地域の体験学習のセンターとして整備していくこととしている。地域の人の手によって、まちづくりが持続されることが当団体の描く将来図である。